


■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

***** : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

 : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。
無償で、非営利かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 Today OCW 朝日講座「知の冒険」
Copyright 2012, マイク・モラスキー

The University of Tokyo / Today OCW The Asahi Lectures "Adventures of the Mind"
Copyright 2012, Mike Molasky

朝日講座 第5回 講義ノート (TA作成)

「居酒屋と喫茶店に見られる昭和ノスタルジー：〈第三の場〉から再生を考える」¹

マイク・モラスキー教授（一橋大学大学院社会科学研究所）²

学生へのメッセージ³

最近、「昭和レトロ」に対するノスタルジーと憧れが目立つ。例えば、新しい居酒屋や喫茶店で昭和20-30年代の雰囲気再生しようと工夫を凝らしている店が増えているが、その際、本当は何を再生しようとしているのだろうか。本講義では、このような町空間を通して〈再生〉を問い直す。

講義メモ

※以下、モラスキー先生の軽妙な講義口調を生かす形で記述していきます。

文中の「私」＝「モラスキー先生」です。

1. 都市空間と「第三の場」(Oldenburg)

災害について講義せよ、とのことでしたが……、講義後皆さんは、この講義自体が災害だったと思うかもしれません(笑)⁴。

それはともかく、

「赤門」をくぐるよりは、赤羽、王子、十条あたりの居酒屋で、オッサンたちと会話している方が好きなのです。

私(＝モラスキー先生)の関心は、このような都市空間、なかでも「第三の場 The Third Place」(Oldenburg [1989]1999)と呼ばれるものにあります。

「第三の場」とは、都市社会学者 Ray Oldenburg によって提唱された概念で、「家、学校でもない、とりたてて行く必要はないけど、行きたい場所」のことです⁵。

¹ 講義後に執筆された『呑めば、都——居酒屋の東京』が2012年10月に筑摩書房より刊行された。<http://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480864185/>

² http://www.soc.hit-u.ac.jp/faculty/mike_m.html

³ 朝日講座 HP より抜粋 <http://www.u-tokyo-asahikouza.jp/各回の概要/第5回-11月4日/>

⁴ 最近、モラスキー先生は落語にハマっているらしい。

⁵ Ray Oldenburg(1932-)は、西フロリダ大学社会学部名誉教授。主な著作に *The Great Good Place*([1989]1999)、*Celebrating the Third Place*(2000)など。*The Great Good Place*([1989]1999)では、インフォーマルな公共的集合スペースが、なぜコミュニティや公共的生活にとって重要であるのかを論じている。彼は、バーや喫茶店、その他の「第三の場」がローカルな民主主義やコミュニティの活力にとっての中心であると主張している(次のHPを参照しました。<http://www.pps.org/articles/roldenburg/>)

今日の講義では、現在の日本における「第三の場」について、その多様性、限界、意義について考えていきたいと思います。

1-1 「第三の場」としてのジャズ喫茶

昨年(2010年)、『ジャズ喫茶論——戦後の日本文化を歩く』(筑摩書房)という本を出版しました。

学術書なのか、批評なのか、エッセーなのか。これらのいずれでもないスタイルなのですが、それは意図的にしたことです。

それにより今一度、『ジャズ喫茶』とは何なのか?」を考え直したかったのです。

ジャズ喫茶は、都会だけではなく地方都市にも多くある。そのことをふまえ、ここでは

「街の活性化に個々の店舗がどのようにかわるのか?」

という問題を考えてみたいと思います。

⇒その前に、「街で知らない店に入る」ということについて。

1-2 独りで観察する——他者との出会いとは?

私は居酒屋のことを「オヤジ系・出会い系サイト」と呼んでいるのですが(笑)、そこは「他者」と出会う場所なのです。

さらに言えば、他者と出会うことで、自分自身に反省が生まれる場所でもあります。

異なる場所・世界に刺激をうけることで新しい体系が生まれます。

独りで、知らない店に入るということ。住み慣れた場所ではなく、興味はあるけど入りにくい場所…。

⇒そこで、**その「空間」を成立させている行動文法を読み取ることが大切です。**

人々が暗黙に了解しているルールを通い詰めることで身につける。「常連」とはいかないまでも、「受け入れて」もらうぐらいまでにはなること……。

⇒一橋の学生には、このような課題を出しています。

重要なのは「**一人で行くこと**」です。

なぜ「一人」なのか?

⇒友人と行くと、周囲の人がなかなか話しかけてこない、自分も友人との会話に夢中になってしまう。

自分が慣れていない世界に押しを踏み入れるということは、人間としての器が大きくなることにつながります。(異文化体験)

何の反省もなければ、人生は滞りなく進みます……。
本からの知識だけではなく、現場に身を置いてそれを確認することが必要です。どんなに立派な理論でも、現場では何の役にも立たないということが多々あります。

言い換えれば、「**批評眼**」は、**行動が伴わなければ身に付きません**。

1-3 日本文化としてのジャズ喫茶

話を元に戻しましょう。

震災後、ジャズ喫茶の現状を自分の眼で確かめなければと思っていました。
すぐに行くと思惑だと思ったので、つい3週間前に被災した3軒のジャズ喫茶に行ってきました。

その前にジャズ喫茶という日本独自の文化について説明しておきましょう。

1-3-1 文化的通過儀礼としてのジャズ——1960年代

ジャズ喫茶は日本独自の文化です。

それは、珈琲一杯で、何のコメントもなしにLPを大音量でかけ続ける「聴く空間」

1960年代当時、輸入LPは当時のサラリーマンの平均月収の約十分の一。
⇒個人で所有、コレクションできる代物ではなかった。
⇒しかし、高尚文化としても認められていなかったため、図書館などには収蔵されておらず、ラジオにおいても専門チャンネルはなかった。

1960年代の日本において、アメリカ以上にインテリの間で比重の置かれていたジャンル。
それがジャズ。

例えば、村上春樹
⇒彼はジャズ喫茶を経営するかたわらに小説を執筆していた。

他にも、大江健三郎、中上健次、倉橋由美子、筒井康隆、五木寛之らなどもジャズを愛好。

そして石原慎太郎のジャズ小説『ファンキー・ジャンプ』

1960年代当時、10代後半から30代前半の新左翼系と呼ばれる文化人にとって、ジャズはある種の**通過儀礼的役割**を果たしていたのです。

・ところで、大体ジャズ喫茶にはどれくらいのLPコレクションがあると思いますか？

例えば、一関市にあるジャズ喫茶「BASIE」には約10万枚のLPコレクションがある⁶。
⇒津波の被害は受けなかったが、店主の年齢は70歳近い。以前話した時は、自分が死んだ後のコレクションのゆくえを心配していた。

⇒被災した3軒のジャズ喫茶の話へ

1-3-2 大槌町の事例——Weather Report、記憶

1964年から営業している岩手県で一番古いジャズ喫茶で、一人の店主が経営していました。

『ジャズ喫茶論』の執筆時に、行こうと思っていたがなかなか都合がつかなかった。いずれ行こうと思っていた矢先の震災でした…。

当日は、釜石市の人(A氏)に案内してもらいました。

現地を訪れてみると何も無い。

A氏が「そこにタイルが見えるでしょ？」といわれたが、見てみると何も無い…。

開店当時から、何も無い周辺的な町で、ずっとLPをかけ続けてきた店だった。

モラスキー先生「何か残ってなかったのか？」

A氏「一枚だけ残っていた」

モラスキー先生「何？」

A氏「Weather Report」⁷

モラスキー先生「…皮肉だね…」

A氏「え？」

モラスキー先生「天気予報だよ。」

A氏「今、気がついた」

…こんな会話をしました。文学をやっていると時として、以上のようなことにも気づいてしまうのです…。

⁶ <http://www5f.biglobe.ne.jp/~toronto/basie.htm>

⁷ ウェザー・リポート (WEATHER REPORT) は、マイルス・デイヴィス・グループに在籍していた ウェイン・ショーターと、マイルスの2枚のアルバムにエレクトリック・サウンド導入で貢献したジョー・ザヴィヌルの2人が中心になり、1971年に結成されたエレクトリック系サウンドをメインとしたアメリカのジャズ・フュージョン・グループ。

(この文章はウィキペディアの当該項目から引用しました。)

店の店主は、地震直後、店に戻ろうとしたが、娘さんに引き戻され高台に避難して無事でした。

しかし、LPコレクション、そして店主は筆まめであったので、大切な手紙類はすべて店内にあった。

⇒それがすべて失われてしまった…。

LP や手紙は、いわば記憶が宿っていたもの。それらを失った場合、当人の記憶はどうになってしまうのか？さらに、今まで、記憶を宿していた場合はこれからどうなるのか？

このようなことを考えます。

※ここでお断りしておきますが、店主の苦労を人々に理解してもらいたいと思いますが、個人的情報は公にしたいくないのです。

その店を再生するとはどういうことなのか？

約50年にわたって集められたLPコレクションも、独特の風合いをもつ店も失われた。単に、店の外装、内装を再現すればよいという話しではない。

なぜ私(モラスキー先生)はジャズ喫茶に注目するのか？

初めは、ジャズ喫茶は都市文化だと思っていました。

しかし、地方の小さな町のジャズ喫茶を考えた場合、ジャズ喫茶は遠い異国の文化を擬似体験させてくれる場所であると同時に、地方においては都会の文化を擬似体験させてくれる場であることに気づきました。

人口15000人の町で、なぜ50年近くも続いたのか？

⇒その店は、もともとはスナック街のバーとして始まった。酒が入ると喧嘩が絶えなかった。

そして店主は都会の大学を出ており、地元で標準語を話すと殴られることもあった。

「自分だけ、ここから抜け出しやがって」という意識があったのかもしれない。

とにかく、一筋縄ではいかなかった。

そこで音楽をかけたところ雰囲気丸くなった。それをきっかけにバーからジャズ喫茶へと転換していった。

その後、有名なジャズマンがたびたび訪れるような店に成長した。

⇒**小さな町で、個人が町の文化にどんな貢献ができるか**

1-3-3 釜石の事例——地元になづいた空間とは

釜石のジャズ喫茶「タウンホール」⁸

⁸「タウンホール再開 震災で被害のジャズ喫茶」岩手日報（2011年11月5日）

釜石市は戦場のような印象でした。

建物の1階部分はほとんど津波にやられて空洞化していた。

「タウンホール」は2階にあったから再開できたのです。

⇒10月にも関わらず宿泊したビジネスホテルでは暖房がまだ普及していなかった。

街の再生を考える場合、商工会議所、タクシーの運転手、居酒屋の店主などの意見を聞いた方がリアリティがあります。

釜石ではタクシーの運転手に、「個人経営の人は、再起にどれくらいかかるか？」と聞いてみました。

すると、次のような答えが返ってきた。「ここらは個人経営を小さい所でやるのは年配の人。若い人は居つきたがらない。仮に再開のためのお金が出て、跡継ぎがないからあきらめる。1世代、20年ぐらいかかるのでは？」

⇒街の再生を考える場合、チェーン店、デパートなどの形態ではなく、地元の活性化につながるものでなければ再生に結びつきません。

人間を中心とした地元根づいた空間

コンビニ、チェーン店など、マニュアル化が進み、どこに行っても同じ。わざわざ行く必要があるのか？結果として魅力を失いすたれていく。

1-3-4 宮古の事例

岩手県宮古市から盛岡市へ移転した Bar Cafe the S⁹

⇒前の店にあったグランドピアノを盛岡の店に持ってきた。

※以上の、非常に周辺の、特定の視点から何が見えてくるのか？

2. 「第三の場」としての居酒屋

で、これらの話をふまえて、居酒屋つまり「赤ちょうちん」文化についてです。

なぜ、居酒屋が続いているのか？

<http://www.iwate-np.co.jp/hisaichi/h201111/h1111051.html>

⁹ <http://livecafe385.com/thes/>

「第三の場 The Third Place」: *The Great Good Place* (Oldenburg [1989] 1999) における概念。

⇒行かなくてもいいが、いつ行ってもいい。客同士は互いのことを知ってはいるけど、名前までは知らない。

⇒自分を受け入れてくれる空間

⇒ある種の「入りにくさ」が常連中心の比重を護る。

⇒これが、誰でもは入れることを可能にしてしまうとローカル性がうすれてしまう。

ジャズ喫茶同様、「赤ちょうちん」は日本独自の文化。

なぜ大切なのか？

2-1 「昭和レトロ酒場」——ノスタルジーについて

街を歩いていると見かける、いわゆる「昭和レトロ酒場」のような、戦後の古き良き、濃密な、元気にあふれた日本の雰囲気再現した居酒屋がある。

しかし、文字は大正時代のスタイル。内装は戦後…。

まさに、ディズニーランド的、テーマパーク的なもの。

一体、何を再現しようとしているのか？

⇒ローカル・コミュニティのはずであるが、働いている人はほとんど20代。

ここで「ノスタルジー」とは何なのか、ということが疑問に浮かびます。

ノスタルジーとは、なかったものに対する欲望。もともと存在しなかったもの、記憶の欠如を想像によって補った過去のこと。

リアリティにこだわるなら、終戦直後に酒場で出されたお酒は出せない。中毒を起こすと失明の危険性があるメチルアルコールが出回っていたから。

それに終戦直後の日本人は「モツ」は食べていなかった。主に食べていたのは強制連行されてきた朝鮮の人々。日本人が食べないものを食べていた。それが戦後の闇市で自分たちの店をだすようになり、自分たちが食べていた「モツ」を出すようになった。

⇒**今までの秩序が壊された時、喪失も大きい**が、**今まで出番のなかった人々が表舞台に登場するチャンスでもある。**

その意味で、まったく同じではないが、**3.11 と終戦の共通性**について考えることは意味のあることだと思います。

2-2 社会的ステータスの一時保留——社会の潤滑油、安全弁としての第三の場

「第三の場」に話をもどしましょう。

Oldenburg ([1989] 1999) が「第三の場」の概念を提起したのは、アメリカ社会において、

そのような場が失われつつあることの危機意識からでした。

このようなことを踏まえずに、そのまま日本の文化にカット&ペーストすることはできません。

この点に注意しつつ、日本における「第三の場」について考えると、それは、単なるストレス解消のためだけではないと思います。

なぜなら、

単なる家庭、職場からの逃避としてのみとらえるならば、「第三の場」が持つ肯定的側面が見失われてしまうからです。

「第三の場」の特徴、それは家庭とは異なるが、アットホームだという点です。

⇒例えば、スターバックスは、戦略的にアットホームな雰囲気作りを行っている。店内にソファを置くのはその一例です。

別の角度から言えば、社会的な役割が、入店した時点でなくなってしまうのです。

例えば、赤羽にある立ち飲み屋「いこい」¹⁰

そこでは高級スーツに身を包んだ人もいれば、作業着の人もいます。

肩書きや収入によってではなく、行動で評価される。

もし来週、この講義の受講者が半減したら、赤羽の「いこい」がその分賑わっているでしょうね（笑）

しかし、このような**社会的ステータスを一次保留する**という働きは、もともと地位の低い人たちのみにメリットがある、という批判がある。

そうではない。

「第三の場」は全員にとって、メリットがある。「社長」、「先生」という肩書きから自由になる。

それは社会から与えられる負担から逃れる空間
⇒アメリカにはそれが少ない。

例えば、日本の銭湯。

⇒なぜ、家に風呂があるにもかかわらず、わざわざ銭湯に行くのか？

⇒単なる入浴ではなく、ちょっとした息抜き、精神の再生に行っているのでは？

すなわち、「**第三の場**」は、**社会の潤滑油、安全弁になっているのでは**。それは飲食が目的というより、「脱力やよろこび」を求めているのではないのでしょうか。

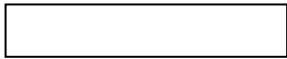
¹⁰ <http://akabaneikoi.web.fc2.com/>

2-3 日本の「カウンター」カルチャー：雰囲気を生み出す「コのプティコン」

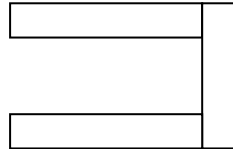
私（モラスキー先生）は、「日本居酒屋ナショナリスト」「赤ちょうちん国粋主義」を自称していますが（笑）、日本の居酒屋は「カウンター」を中心とした文化です。

まさに、日本の〈カウンター〉・カルチャーです（笑）。

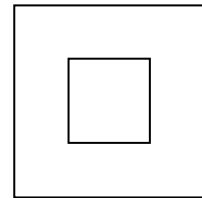
カウンターには様々な形があります。



一本カウンター



「コ」の字



炉端焼き風

一番メジャーなのは「コ」の字型。

では、なぜ「コ」の字型が多いのか？

それは、全員が全員の顔を見れる点にあります。

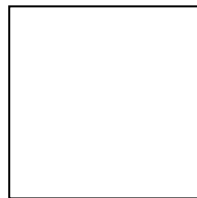
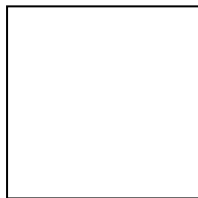
全員の顔が「見える」ということは、自分の行動が、他人に「見られている」ことを意味します。

ここで、フーコー流の「パノプティコン」を連想する方もいるでしょうが、そんなに陰険な世界ではありません。

「コ」の字型は、他人の会話を何気なく聞けるという空間を生み出します。

内装の工夫により、人間関係が規定されてしまっている、人間関係ができにくくなってしまいうことに空間を見る際注意しましょう。

例えば、チェーン店の机の配置。



基本的に、隣のテーブルの会話は「聞こえない」ものとして捉える。隣のテーブルの会話に聞き耳をたてて、それに加わることはトラブルの要因。

これに対し、「コ」の字型は、一つの共同体を促す構造になっている。

このような「カウンター」を中心とした「第三の場」としての居酒屋は、全員がその場のメンバーであるという「われわれ意識」が形成される。

ゆえに、迷惑な客に対しては、店主より先に客が怒り出す。
⇒例えば、私（モラスキー先生）もこないだ、居酒屋でうるさい客を注意したばかり。

そこは中央線沿線の夜中の2時までやっている居酒屋で、客は自転車か徒歩できている。地元客があつまる店。（それに対し、吉祥寺などは終電に合わせて夜中の12時に閉店する店がほとんど）

おそらく騒いだ客は。雑誌かなにかでその居酒屋のことを知り、「消費者」として居酒屋を訪れた人たちだったのでしょ。

外から来る人は腰が低くないといけない。なぜなら、

そこには、「暗黙のルール」があるから。

空間を歴史的に捉えながら、その社会的機能を考える必要があります。

2-4 コミュニティの前提としての尊敬

再度、復興の話しに戻りましょう。

震災で、飲み屋街が失われましたが、それはコミュニティの集まりの場所が失われたことでもあります。

⇒フランスのカフェ、イギリスのパブのような

「第三の場」としての居酒屋は、店主だけではなく、そこに集う客たち自身が店の空間を作り上げている。

自分たちのものという意識が働くからこそ、場の秩序を乱す者にたいして憤慨する。

これは、一見排他的かもしれません。

しかし、そこで、どのようにふるまうか、自・他に対する「**尊敬の念**」がコミュニティの前提にあるのです。

行政は復興に際し、どこに何を立てるかを問題にしますが、しかし、コミュニティは、そこに集う人々が作り上げるものであるとすれば、再生はそれほど容易なことではありません。

3. 質疑応答——自分たちにとっての「第三の場」とは？

ここで、自分にとって「第三の場」といえるものがあるかどうか？

もし、「第三の場」を作るとしたらどのようなものを作るかグループで考えて見て下さい。

第1グループ

ジム、スポーツ教室、キャバクラ、病院、喫煙所など。

モラスキー先生のコメント

- ・「第三の場」は、基本的に一人でいつも行ける場所、しかし、一人だけ孤独ではないところ。
- ・喫煙所は、性別、職業、年齢の違いはあるけれども、喫煙という点で共通しているのが面白い。あまりお勧めはしませんが……。

第2グループ

銭湯、足湯、バー、釣り堀、公共交通機関

コメント

- ・確かに、日本では電車やバスの中で見知らぬ乗客同士が会話することは少ない。
- ・釣り堀は面白い。釣りは二次的な目的で、そこでの人間関係を楽しむ人もいるのでは。例えば、ジャズに「Alone Together」という曲がある。一応一人一人だが、互いに程良い距離感をもっているような感じ。

第3グループ

バーなどで店員と話すこともあるが、暇だから行っているのでは？

日本では、話すのはめんどくさい、何となく「壁」がある。

しかし、誰かと話したいという思いはあるから、ツイッターなどで間接的につながりたいのでは？

コメント

- ・アメリカの人類学者の研究で、日本の喫茶店文化は、ゆっくりする、ボーっとするなどの非日常を楽しむ側面が強いということが指摘されています。
- ・そして、バーチャルな空間がコミュニティ形成にどのように関わるのかについては重要な問題。例えば、中東の例。
⇒Oldenburg ([1989] 1999) の議論は、ネットが普及する以前の話。
- ・日本人には「壁」があるというが、だからこそアルコールが重要だと思います。

第4グループ

このグループでは、「第三の場」を持っている人はいなかった。

一人で店に入り、知らない人と交流するのは抵抗がある。

同じものを共有することは大切だとおもう。例えば、銭湯、ジム、図書館など。

同じものを共有することで、人と交流するきっかけになるのでは？

コメント

- ・Oldenburg は、「第三の場」の特徴として、外から見ると皆同じことをしているように見えるが、中に入るといろいろな人が様々なことをやっていることが分かる、という点を挙げています。共通点は、たしかにきっかけになる。

第5グループ

あまり「第三の場」を持っている人はいなかった。

強いてあげるなら「習い事」が「第三の場」になりうるのでは？

「第三の場」の特徴としては、「閉じているけれども開いている」、「共通のものがなけれ

ばキツイ」という意見が出された。

コメント

- ・日本の大学の特徴はクラブ活動が盛んであるということ。
- ・よって大学内ですべてが完結してしまっている。
- ・例えば、私（モラスキー先生）は将棋が好きで、将棋クラブに行くのですが、そこではいろいろな人と対局します。しかし、大学ならば将棋部に行けばよい。
- ・結局、家庭と職場の間にあるということが大切になるのでは？就職していないから、その大切さがわからないのでは？日本の大学はよくも悪くも完結している。

第6グループ

このメンバーも、誰かと話すために出かける場所は持っていなかった。

「第三の場」の例としては、スポーツクラブや、「趣味の集まり」などの意見があがった。

また、「第三の場」を作るとしたら、24時間あいている店があるといいのではないかという意見が出された。

コメント

- ・資本主義社会では、何かの目的のために動かない時間は無駄とされてしまう。
- ・しかし、目的がない行動こそが大切という価値転換が Oldenburg の話。

第7グループ

「第三の場」の例としては、茶道やクラブハウスめぐりなど

日本人はシャイだから、共通の趣味は他人とつながるきっかけになるのでは。

コメント

- ・先日山歩きに行ったのですが、そこですれ違う人々が「こんにちは」と挨拶している。
- ・社会と離れたところで開放感を味わっている場合もあるのではないか。

第8グループ

「第三の場」の例としては、近所の中華屋、バーなど。

「第三の場」を作るとしたら、ゆるやかなテーマがあった方がよいということで、スポーツバーなどはどうだろうか？という意見が出された。

コメント

・スポーツバーはまさに「第三の場」と言いたいところですが、テレビがずっとついていう特徴があります。

・居酒屋などで、音がないところはどれぐらいあるか想像見てみて下さい。おそらく1%もないのではないか？逆に有線、CD、テレビなどをかけていないところはほとんどない。

最後に

「第三の場」は、大学を卒業してからの精神栄養剤として必要です。

皆さんが「再生」にとって、何が大切なのか根源的に考える必要があります。

その可能性を提示する意味をこめての今日の講義でした。（拍手）

参考文献

- ・マイク・モラスキー『戦後日本のジャズ文化——映画・文学・アングラ』青土社、2005年。
- ・マイク・モラスキー『占領の記憶／記憶の占領——戦後沖縄・日本とアメリカ』鈴木直子訳、青土社、2006年。
- ・マイク・モラスキー『ジャズ喫茶論——戦後の日本文化を歩く』筑摩書房、2010年。
- ・マイク・モラスキー著『呑めば、都——居酒屋の東京』筑摩書房、2012年。
- ・宮脇俊文、細川周平、マイク・モラスキー編著『ニュー・ジャズ・スタディーズ——ジャズ研究の新たな領域へ』アルテスパブリッシング、2010年。
- ・Ray Oldenburg, *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community*, New York: Marlowe & Company; 3rd edition, 1999 [1st edition, 1989].